門司港レトロ地区の
シンボル的存在

旧門司税関

Old Moji
Customs Bldg.

福岡県北九州市の門司港レトロ地区の中心に建つ2階建て赤レンガの建物。明治末期から昭和初期まで税関の庁舎として使用されていた「旧門司税関」です。

門司港レトロ地区は平成7（1995）年にグランドオープンして以降、年間200万人を超える観光客が訪れる北九州市を代表する観光地となっています。

本稿では、門司港レトロ地区のシンボル的存在である「旧門司税関」についてその歴史とともに紹介します。

門司港と税関の始まり

明治初期、政府が「富国強兵」をめざして、殖産興業に力を注いでいた頃、朝鮮半島や中国大陸に近いという地理的優位性から、門司の地が注目されるようになりました。

明治21（1888）年12月、渋沢栄一、安田善次郎、浅野総一郎らが参入して門司築港株式会社が設立され、明治22（1889）年に埋立工事等の築港が開始されると、同年7月30日に門司港は特別輸出港に指定され、石炭、硫黄、米、麦、麦粉の5品目に限り直接海外に輸出できるようになりました。

外国との玄関口には税関を欠くことができませんので、同年11月の特別輸出港の施行に併せ、長崎税関の出張所として、門司長崎税関出張所が日本郵船株式会社の一室を借りて設置されました。

開港と門司税関の独立

明治24（1891）年、門司駅（現在の門司港駅）ー遠賀川駅間の開業により、筑豊（九州北部）で産出された石炭を運ぶ鉄道ルートが開通し、海上輸送と陸上輸送が接続された物流インフラ（SEA & RAIL）が完成したことで、門司港の貿易量が加速していきます。

明治23（1890）年の入港隻数は86隻でしたが、明治31（1898）年には1,076隻まで増加し、日本で5番目の入港隻数を誇る港となりました。輸出額でも横浜、神戸に次ぐ長崎と肩を並べるようになり、特に石炭の輸出については、中国向けを中心に増加し続け、明治29（1896）年には全国トップの石炭輸出港に成長しました。

他の開港を上回る輸出量と地元からの開港要望もあり、明治32（1899）年に開港指定を受けることになります。開港となった門司港は、その後も入港隻数及び貿易額を順調に増やし、明治34（1901）年には貿易額で長崎港を上回るようになりました。

そして、明治42（1909）年11月5日に門司税関は長崎税関から独立しました。

開港前の（現）門司港開港前は塩田が一帯に広がる寒村でした

庁舎の歴史　時代を見守る

門司税関として2代目の庁舎となる旧門司税関は、完成後すぐに焼失した初代庁舎と同じ場所に明治45（1912）年に建設されました。この建物は、横浜・赤レンガ倉庫などを設計したことで有名な明治建築界の三大巨匠の一人とされる建築家・妻木頼黄が関与した現存する数少ない建築物の一つです。イギリス積みという工法で建設され、壁の厚さが50センチ近くあり、赤レンガ造り瓦葺2階建造物で、海に面した一角は3階部分に見張所が設けられていました。この庁舎は、3代目庁舎が完成する昭和2（1927）年まで使用され、九州北部の新産業の勃興により、原料を輸入し、製品を輸出する形で貿易が発展していった時代を見守っていました。

復元された2代目門司税関庁舎（旧門司税関）

2代目門司税関庁舎

門司港のシンボルとして

旧門司税関には、展望室、エントランスホール、休憩室、喫茶店のほか門司税関広報展示室（33㎡）が設けられ、門司港レトロ地区の他の施設と共に北九州市の観光スポットになっています。

税関を感じるポイント

• ポイント1 •
3階の見張所へ続く階段

• ポイント2 •
3階見張所（北と東に向いた窓）

昔はここから港に停泊する
船舶の監視を行っていました

空襲による被災と復元

3代目庁舎へ移転後、民間企業に払い下げられていた旧門司税関の晩年は、屋根が落ち廃墟状態になるなど、一時は解体まで計画されました。しかし、妻木頼黄が監修した現存する貴重な建物であり、明治時代の赤レンガ建築として極めて優れていることから、門司港湾地域の観光復興と活性化のため、北九州市港湾局が建物を取得し、平成3（1991）年から4年の歳月をかけて旧門司税関は当時の姿に復元されました。

平成19（2007）年11月30日、門司港レトロ地区の代表的な建造物である「旧門司税関」、「旧門司三井倶楽部」、「旧大阪商船ビル」、「JR門司港駅」、「九州鉄道記念館」は、経済産業省の近代化産業遺産群31（筑豊炭田からの石炭輸送・貿易関連遺産）*として、他の関連施設等とともに認定されました。

税関展示室

広報展示室では、社会悪物品や金の隠匿手口、コピー商品等の知的財産侵害物品、ワシントン条約関連物品などを展示しており、世代を問わず多くの来場者の関心を集めています。

1階北九州市の常設展示（長崎税関時代の令達も）

終わりに

旧門司税関庁舎が地域活性化事業の一つとして改修され、往時の姿を取り戻したことは、門司税関にとって幸運なことでした。地元の方々にも「旧税関」と呼ばれ親しまれているように、これからも地域とともに成長し、愛される税関でありたいと願わずにはいられません

*31の遺産群では、三池炭鉱関連遺産として、旧長崎三池支署も認定されています。

参考資料：門司税関百年史
北九州市史